

「誰も排除しない主権者教育とは？」

夜間中学校の社会科での実践を通して

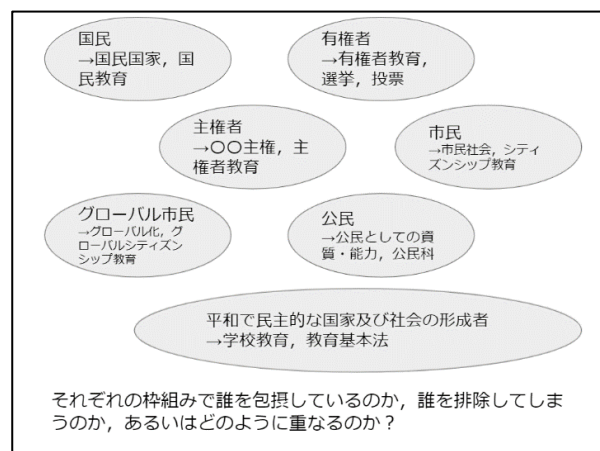


開催日時：2021年5月29日（土）13：00～14：30

参加者：24名（運営含む）

趣旨説明

趣旨説明の際、企画担当者の小田切瑞生（山梨大学大学院・院生）さんから、主権者の定義やその枠組みで想定されていない人の存在について問い直す必要があるのではないかと指摘がありました。様々な枠組みを利用することで、無意識的にも、だれかを排除、包摂している可能性があることを踏まえ、多くの外国籍の子どもが移籍している夜間中学校の先生にお話し頂くことになった経緯を皆で共有しました。



趣旨説明の際のスライド

話題提供

話題提供者の先生からは、戦後の混乱期に中学校夜間学級ができた歴史的経緯や現在の夜間学校では外国につながるのある人で母国で義務教育を修了できなかった人が多いなど、「時代時代をよく表している」という夜間学校の変遷についてご説明いただきました。また現在の外国人の就学状況などを踏まえ、「本来『あってはならない』が『なくてはならない』学校」という夜間学校の性格について整理していただきました。

話題提供者の先生は、社会を生き抜く力を生徒につけて、人生が少しでも豊かになるように、社会科を教えているとのことでした。そのうえで特に授業で気を付けていることとして「日本語勉強中の生徒への配慮」「苦手意識をもたせないようにする」「実生活とリンクさせる」という三点を挙げておられました。その際、例えば、労働法の授業を挙げながら、日本語への配慮の具体を示しつつ、自分で自分の身を守るようにしてほしいという想いを語っていただきました。先生自身、教えている生徒が「主権者」の枠に入るのかどうかや、生徒たちが主権者になりたがっているかどうかなど、日々葛藤を感じていると率直に述べられていました。そのうえで、主権者というよりも「社会の構成者」として育ててほしい。さらには、「地球のどこにいても、自分で考え、自分でよりよい選択をし、社会に関わっていける力」を付けるのが目標だというご自身の教育観を説明していただきました。

質疑応答

授業の際に困難ややりがいについての質問がありました。話題提供者からは日本語指導での難しさがある一方で、多様な国から来ている生徒がいることで、多様な文化や生活の違いがわかって、自分も生徒も勉強になるとの回答がありました。また、外国人の権利や、選挙権、戦争や平和、歴史の捉え方など、センシティブで扱いづらい内容があるかについての質問が複数なされました。話題提供の先生からは、様々な背景を持つ生徒を配慮した、授業教材の選び方の工夫をご紹介いただきました。また主権者という言葉、agency（社会的な主体）と広く捉えるか、その言葉の持つ懸念をどの程度意識すべきかという問題、さらには選挙以外の参加方法についても論じていく必要があるなど、様々な意見交換が交わされました。

（主な企画運営：小田切・別木・浜田・古野・斉藤／報告担当：斉藤）